総務常任委員会行政視察報告書

１　視察日程

令和５年１０月１２日（木）～１３日（金）（２日間）

２　視察市及び項目

⑴　新潟県燕市

『つばめ若者会議』の活動とその支援の取組について

⑵　新潟県新潟市

新潟市における防災の取組について

３　人員

委員長	末永　隆
副委員長	塚本路明
委員	嵐　芳隆
	大塚裕介
	飛知和　真理子
	堀口明子
	三田　登
書記	吉橋俊輔

『つばめ若者会議』の活動とその支援の取組について

（新潟県燕市）

日時：令和５年１０月１２日（木）　午後１時３０分

説明者：燕市企画財政部地域振興課

◇視察目的

活力のあるまちづくりのためには、若い世代がまちづくりに関心を持ち、何らかの形でまちづくりに参加できることが不可欠である。しかしながら、若い世代の地域活動等への参加が少ないことや、選挙における投票率の低さに、若い世代のまちづくりへの関心の低さが表れており、課題となっている。

燕市では、若い世代のエネルギーをまちづくりに活かしながら、人材育成等を行うことを目的に、平成２５年から若者が主体となったまちづくり事業「つばめ若者会議」を実施。また、令和２年には高校生をターゲットにした「燕市役所まちあそび部」がスタートし、この取組が令和４年度ふるさとづくり大賞「地方自治体表彰（総務大臣表彰）」を受賞するなど、若い世代がまちづくりに参加するための様々な事業を進めているところであり、燕市におけるこれらの取組を参考とすべく、視察を実施した。

◇視察概要

・つばめ若者会議は、次世代のリーダー・まちづくりの担い手の育成、若者同士のつながりづくり、若者の活躍推進を目的に、平成２５年にスタートした燕市のまちづくり事業である。高校生から４０歳までの方で、出身地域を問わずメンバーとして登録できる。

・高校生を対象とした「燕市役所まちあそび部」、２９歳以下の学生・社会人を対象とした「燕（エン）ジョイ活動部」、３０歳以上のメンバーによるまちづくりや福祉がテーマの活動をするチームといった、３つの年代別のチームに分かれて活動している。

・事務局による支援として、高校生の「燕市役所まちあそび部」に対しては、テレビコメンテーターなどで活躍されている若新雄純（わかしんゆうじゅん）氏にコーディネートを委託しているほか、会議の実施、企画・調整等まで全体的なサポートを行っている。それ以外の社会人グループの活動に関しては、それぞれに任せ、外から活動を見守るような支援体制となっている。

・つばめ若者会議の特徴は、政策提言型ではなく、若者の自主性と主体性を重視している点、また、成果や結果を求めるのではなく、まずは地域のことを知ってもらい、地域と関わるきっかけをつくることに重きを置いている点にある。

・地域の課題解決を目的としたまちづくりの場ではなく、あそびを通じた活動から、自分のまちを知り、まちへの愛着心を育むことを目的としている。

・「燕市役所まちあそび部」の取組が、令和４年度ふるさとづくり大賞「地方自治体表彰（総務大臣表彰）」を受賞。若者に押し付けるまちづくりではなく、若者自身が楽しむ場を創出し、地域の大人も協働している点などが評価された。

・これまで累計２６１名の若者が参画し、１３３の事業に取り組んでいる。当初は大きなイベント等を目標に活動していたものの、目標を達成すると燃え尽きてしまうことがあり、現在では大きな目標・ゴールを設定せず、小さな事業・体験を積み重ねていく方針としている。

・若者をサポートする際のポイントとして、①課題を提示しない、②意見やアイデアを否定しない、③結果や成果を意識させない、この３点が重要なポイントとなっている。

◇質疑応答

質問　卒業などを機にメンバーが抜けていくと思うが、新しいメンバーの確保はできているか。

回答　毎年春に、近隣の高校・大学を訪問し説明会を行うなど、新しいメンバーの募集を行っている。「燕市役所まちあそび部」では、昨年度は３６人が卒業したものの新たに４４人が加わっており、新しいメンバーの確保はできている。

質問　今後「燕市役所まちあそび部」の活動に市民参加型の事業を増やしていくことは考えているか。

回答　あくまでも高校生の自主性と主体性を尊重しており、事務局が誘導することはしないが、「ゆるい、なつまつり」のように、市民を巻き込む事業が発案された際には積極的に協力したい。また、そのような機会が増えることを望んでいる。

質問　つばめ若者会議を経験して、燕市役所に就職したいと希望する者はいるか。

回答　既に数人が燕市職員として採用されており、現在のメンバーの中にも燕市職員を目指している学生がいる。また、つばめ若者会議経験者が市の総合計画の審議会メンバーになるなど、まちづくりや行政への参画につながっている。

◇所感

つばめ若者会議参加者の声として紹介された「与えられたものがあると、いつか返したくなる」という言葉が大変印象的であった。本市においても、持続可能なまちづくりを進めていく上で、将来を見据え種を蒔くような、若い世代の参画を促す取組の必要性を感じた。

今回視察させていただいた燕市の取組は、本市においても大変参考になるものであり、今後の活動に生かしてまいりたい。

新潟市における防災の取組について

（新潟県新潟市）

日時：令和５年１０月１３日（金）　午前１０時

説明者：新潟市危機管理防災局防災課

◇視察目的

東日本大震災をはじめとした大規模災害時には、女性が避難生活を送る中で、プライバシーの確保や衛生用品の配布、防犯・安全対策、避難所内での役割分担等において様々な課題が浮き彫りとなった。このため、避難所運営委員会の役員等への女性の参画・登用を進め、意思決定などの場に女性が積極的に関わることや、自主防災組織等の役員についても女性の参画・登用を進め、地域の防災訓練に多くの女性が参加し、日頃から女性の視点を取り込んだ防災対策を進めることが重要となっている。

新潟市では、市内で防災に関わっている女性や関心のある女性が集まり、防災について感じていることを語り合う「やろてば！防災女子カフェ」をはじめ、女性の防災意識向上、防災活動への参画の促進、女性の視点を取り入れた防災知識の普及啓発を促進する事業を実施しているところであり、新潟市における取組について参考とすべく、視察を実施した。

◇視察概要

■女性防災リーダーの育成

◎目的

・女性の防災意識の向上を図り、防災活動への参画を促すこと。

・女性の視点を取り入れた防災意識の普及啓発を図ることで、男女共同参画の視点を取り入れた体制づくりを促進する。

◎これまでの取組

・「親子防災講座」（平成２７年度～令和３年度）

・「やろてば！防災女子カフェ」（平成３０年度～令和３年度）

・新潟市防災士の会の女性部会「新潟防災女子（ＮＢＪ）」（令和元年度～）

・やろてば！防災女子カフェに代わり、「多様な視点で防災力アップ講座」を開催（令和４年度～）

■やろてば！防災女子カフェ

・防災活動に関わっていたり、防災に関心のある女性を対象に、所属している団体の活動紹介やグループトークなどを実施。

・平成３０年度から令和３年度までに５回開催し、延べ１６９人が参加。

・参加者から、「防災への意識が変わった」「女性同士だからこそ参加しやすかった」「情報交換の場や新しいつながり、発見の機会になった」などの意見が多く好評であった。

・講座の中で防災士の資格取得について情報が共有されたことで、防災士への関心が高まり、女性の防災士が増えた。

・課題として、意欲のある女性でも実際に活動の場がない、地域組織で防災活動に携われないという意見もあった。

・その課題解決に向け、女性への啓発のみではなく、男性への働きかけを行う必要があると考え、誰もが地域の防災活動に参画しやすい体制づくりを促進するため、男性も対象とした「多様な視点を活かした防災力アップ講座」を令和４年度から実施。

■新潟市防災士の会の女性部会「新潟防災女子（ＮＢＪ）」の設立

・新潟市防災士の会は、防災行政に協力し、地域の自主防災組織等との連携により、地域における防災力の向上と防災意識の向上に資するとともに、会員の防災に係る知識と能力の向上及び会員相互の親睦を深めることを目的に設置された。

・内容としては、自主防災組織、自治会等と連携し、地域における防災活動の実施、市の防災関連事業への参加、学校での防災教育の講師などを行っている。

・会員数は各区合計３６１人。そのうち女性は６９人であった。

・そのような中、令和元年度に新潟市防災士の会の女性部会「新潟防災女子（ＮＢＪ）」を新たに設置。

・女性視点で防災を考える体制づくり、防災士の会女性会員の活動を活性化させ、女性会員数の増加につなげる、防災士でない女性の力の活用促進を図る活動を行っている。

■今後の方針と課題

・新潟防災女子（ＮＢＪ）の活動を支援することで、地域防災活動に女性の視点を取り入れることの重要性を広め、女性防災士が増えるような呼びかけを行っていく。

・「多様な視点を活かした防災力アップ講座」を引き続き実施し、多様性への理解と女性の防災活動参画の機会の増加を目指す。

・性別を限定しない場合、講座への参加者は圧倒的に高齢の男性が多いことから、女性や若い世代から興味を持ってもらえるような仕組みづくりが必要。

◇質疑応答

質問　「やろてば！防災女子カフェ」を廃止し、「多様な視点を活かした防災力アップ講座」に移行した経緯について。

回答　回数を重ねることで、女性だけへの働きかけには限界があることが分かり、誰もが地域の防災活動に参画しやすい体制づくりを促進する方針とした。また、メンバーの固定化が顕著になったことなども理由の一つ。

質問　取りまとめ役となるコーディネーターについて。

回答　「やろてば！防災女子カフェ」、「多様な視点を活かした防災力アップ講座」は、完全な市の自前の事業ではなく、ＮＰＯ法人と共同で事業を行っている。ＮＰＯ法人と参加者でワークショップの内容、運営方法を協議し開催している

質問　八千代市は被災経験が少ないこともあり、住民の防災意識が低いように感じている。新潟市において防災意識の向上に効果的であった取組はどのようなものがあるか。

回答　「多様な視点を活かした防災力アップ講座」において、令和４年８月の豪雨災害で被災した村上市の高根集落の住民の方をお招きし、当時の様子を伺うゲストトークを実施した。災害を自分事として捉えるのに有効であったと思われる。

◇所感

防災、そして被災時の活動において住民の協力・団結は重要である。本市においても、女性はもちろんのこと、防災に関心のある住民の活動意欲を生かし、意見交換ができる場が必要であると感じた。

また、今回の視察では、新潟市の自主防災組織の世帯カバー率が約９３％と非常に高く、地域特性による本市との違いがあることや、本市と同じように公共施設の統廃合による避難所の在り方等について課題を抱えていることなど、防災一般について幅広くお話を聞くことができた。

今回視察させていただいた新潟市の取組は、本市としても大変参考になるものであり、今後の活動に生かしてまいりたい。